

illustrated by Kurumi

『「真剣」でやってみよう』 いのはなはるこ

ここのところ毎日年長のロクは家で劇づくりの報告会をしています。
「今日も〇〇さんと〇〇ちゃんケンカしちゃったの。」
「ふざけてると、女の子たちに怒られるんだよ。」
それを聞いていた20才の次女が「ね、ふざけちゃいけないんだよね。」と。
「私も劇の練習で、きーちゃんとユウヤとふざけてたら。亡くなったあの
おばあちゃん先生にめちゃくちゃ怒られた！」と14年前を思い出しています。
「どうして怒られたのかね」と訊くと、「真剣にやってなかったからじゃない？」と。
「真剣じゃないと、結局はやっても面白くないんだよね。」と言います。
「あばあちゃん先生も真剣だったんじゃない？」と。

子どもにとっては遊びも真剣勝負。おとなの「遊ぶ」という言葉とは違ってきます。
ロクが私と鬼ごっこしても面白くなさそうなのは、真剣に付き合ってくれないからです。
友だちやお兄ちゃんなら、真剣に追いかけてくれます。
泣かされても、真剣にやって欲しいのです。

そういえば、私の子育ても長男のことばかりが強烈に残っています。
悩んで、怒ったり泣いたりした日々ばかりを思い出します。
私が毎日真剣に長男と向き合っていたのでしょう。
子どもは大人の「テキトー」を見抜きます。
ロクは、私が真剣に話を聞いてくれないと見抜いています。
真剣勝負はまさに剣のように傷つくこともあります。
そして、とてもパワーが必要で、ぐったりと疲れます。
それでも、子どもとの毎日を「ごっこ」ではなく、「本気」で付き合おう。
と、懲りずにネジを巻き直している最中です。
真剣にやってみると「達成感」というご褒美が自分にもらえるのです。

harukoinohana1717@gmail.com

